SHOW-HEYシネマルーム

★★★★

逆火（ぎゃっか）

2025年／日本映画
配給：KADOKAWA／108分

2025（令和7）年7月26日鑑賞　テアトル梅田

Data　２０２５－６５

監督・原案：内田英治
出演：北村有起哉／円井わん／岩崎う大／大山真絵子／中心愛／片山礼子／岡谷瞳／辻凪子／小松遼太／金野美穂／島田桃依

みどころ

映画は脚本（ホン）が命！それはその通りだが、他方で、映画は商売、興行だから、収益性も大切だ。そのため、映画製作の現場はいつも、芸術性と商業主義とのせめぎ合いに！

それは、出版界も同じ。小原有紗が若き起業家として今脚光を浴びているのは、彼女がヤングケアラーとして寝たきりの父親を献身的に介護した体験をまとめた作文が受賞した上、父親の死亡に伴う生命保険金が入ったためだ。

そんな自伝小説『ラスト・ラブレター』が大ヒットしたのなら、河野実と大島みち子の自叙伝『愛と死を見つめて』（64年）と同じように、それを映画化すれば大ヒットまちがいなし！そんな思惑の中、助監督の野島浩介が取材を重ねていくと、アレレ、アレレ。その原作はホント？それとも美談のでっち上げ・・・？

「逆火（きゃっか）」とは面白いタイトルだ。“真実”とはなにか。人の人生を語る映画が“感動”のため脚色され歪められた時、それは芸術たり得るのか。燃え盛る虚構の炎の中で、野島は小さな“反逆”を胸に秘めながら決断の時を迎えたが、本作が最後に描く「野島が迎える現実」には大幻滅だが、「償いのことも考えています」と語った有紗の潔さと、償いの実行をどう考えれば・・・？

――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――

■□■こりゃ面白そう！久々の邦画の問題提起作！？■□■

近時の邦画は純愛モノ、キラキラものがやたら多いから、私は全然観る気がしない。したがって、俳優の名前と顔もほとんど頭に入らなくなってきている。そんな中でも北村有起哉の名前と顔はわかるし、チラシに躍る「この女は、悲劇のヒロインか、犯罪者か？」、「『感動の実話』の真相」、「映画とは芸術かビジネスか」等の見出しを見れば、こりゃ面白

そう！

また、チラシには、「『実話』と銘打たれた『新作映画』の感動ストーリーが、嘘だとしたら？」、「現場を任された助監督が、主人公の疑惑の『真相』に迫る、『ミッドナイトスワン』の内田英治監督が描く衝撃のヒューマンサスペンス」と書かれていたが、確かに『ミッドナイトスワン』(20 年）は面白かった。さらに本作鑑賞後、『地球でたったふたり』(07 年）（『シネマ 22』264 頁）が内田英治監督の監督作品だと知って改めてビックリ！同作は面白かった。

■□■物語は興味深い“映画製作の現場”からスタート！■□■

私は飲酒運転による交通事故をテーマにした映画『0（ゼロ）からの風』(07 年）（『シネマ 15』214 頁）を鑑賞した後、同作のディスカッションを通じて、今は亡き塩屋俊監督と親しくなった。そのおかげで、彼の監督作『ふたたびーswing me againー』(10 年）（『シネマ 25』92 頁）の製作現場に足を運び、興味深い映画製作の現場をこの目で確認することができた。本作は、橘郁美（片岡和子）をプロデューサーとし、大沢祥平（岩崎う大）を監督とした映画『ラスト・ラブレター』の製作現場からスタートするので、それに注目！

これは、若きベストセラー作家・小原有紗（円井わん）が、ヤングケアラーとして寝たきりの父親を貢献的に介護しながら苦悩を乗り越えて成功した“奇跡の人生”を描いた自伝小説『ラスト・ラブレター』の映画化だが、今は撮影 1 ヶ月前だから現場は大忙しだ。この自伝小説は、寝たきりの父親が娘のために密かに 2000 万円の生命保険に入っていたことがキモ。つまり、父親の思いがけない死亡と思いがけない保険金の入金によって有紗は新たな人生を切り拓くことができ、それがその後の若き起業家としての成功に結びついたわけだ。なるほど。そんな物語を今ドキ珍しい美談として小説にすれば、小説は大ヒット！それをスクリーン上に描けば映画も大ヒット！

大沢祥平監督も橘郁美プロデューサーも私の目には社会派なのか商業主義派なのかよくわからないが、助監督の野島浩介（北村有起哉）が“トコトン社会派”であることは、その後に展開していく彼の取材風景を見ればよくわかる。撮影 1 ヶ月前ともなれば、もちろん脚本は完成しているから、助監督たる野島は、撮影現場ではアパートの階段から落ちる父親は仰向けに倒れるの？それともうつ伏せに倒れるの？等の細かい打ち合わせや、予算の関係でその舞台をセットで？それともロケハンで？等の打ち合わせで忙しいはずだ。ところが、野島はそんな打ち合わせはスタッフに任せ、自分はしつこく有紗の周辺人物への取材を進めていたから、アレレ。さらに、取材を通じて有紗は父親の生命保険の存在を父親の生前に知っていたことがわかった上、有紗は決して理想的なヤングケアラーなどではなく、暴力を振るう父親を憎んでおり、その死を願っていたかもしれないことがわかってきたから、アレレ、アレレ・・・。

■□■感動的な“実話”の実態は？そんな話、あるはずない！■□■

河野実と大島みち子の自叙伝『愛と死をみつめて』がベストセラーになったのも、レコ

ード会社各社が共作した『愛と死をみつめて』を青山和子が歌って大ヒットし、レコード大賞を取ったのも、そして吉永小百合と浜田光夫のゴールデンコンビニによる映画『愛と死をみつめて』が大ヒットしたのも1964年。多感な中高生時代にその小説を読み、レコードを聴き、映画を観て感動した私は、中年、老年になってからの同作の鑑賞でもなお感動した。

しかし同時に、私は同作がどこまで本当でどこまでが美談として強調されているかについては、当初から疑問を持っていた。そんな私は、本作の小原有紗の奇跡のような人生を描いた自伝小説『ラスト・ラブレター』のどこまでが本当かは最初から疑いをもっているし、むしろハナからそれがすべて本当とは信じていない。しかし、野島浩介はそうではなかったらしい。したがって、自分自身の突撃取材によって次々と小説とは違う事実が突きつけられてくると、彼の頭の中にはその度にそれをそのまま映画化することへの疑問が湧いてきたらしい。

そこで、最後の手段として有紗に直接取材してみると、意外にも有紗はあっさりと「作文は賞金目当て」「感動的な話にするために嘘をついた」と認めたから、アレレ、アレレ。そこで野島が「そんな嘘を小説にしていいのか」と出版社に青臭い質問をしたところ、「その程度の編集は当然じゃないですか」と切り替えされてしまうことに。さあ、野島浩介はどうするの？

■□■野島の一人娘は？こりゃ家庭崩壊！その責任は？■□■

昭和の“モーレツ時代”を生きた私たち団塊世代の男が、父親として思春期になった高校生の娘の気持ちを理解するのが難しかったのは当然だが、本作が描く野島の時代にあっても、それは同じらしい。いや、スクリーン上をみていると、野島と高校生の一人娘・光（中心愛）との冷え切った関係はそれ以上だ。

夜遅く家に帰ってきた光は、父親はもちろん、母親の野島幸（大山真絵子）にも一言も声をかけることなく自分の部屋に入れば、それで彼女の1日はすべて終わりらしい。それでも野島は、「まだ家に帰ってくるからいいじゃないか」と妻を慰めていたが、さてト一横の歩道上にしゃがみ込み、ホストクラブに通う女子高生たちの生態は？また、次第にモンスター化していく女子高生の娘・光の生態は？

しつこく有紗の取材を繰り返した野島は、ある日、有紗が出入りしていたという怪しげな会社の取材をしている最中に娘・光の姿を発見したからビックリ！さすがに野島は力づくで光を家に連れ戻したが、そんなことで問題が解決できないことは明白だ。ここまでの家庭崩壊の姿は珍しいが、その責任は一体誰に？

■□■映画制作は中止？それとも？■□■

取材活動の中で、野島は疲れ果て消耗しきっていたから、助監督としての仕事はろくに果たせていなかったはず。そんな状況下のある日、製作現場で「本作の撮影は中止！？」の噂が流れると、仲間たちは一斉に野島に対して白い目を！いたたまれなくなった野島は

腹をくくって、大沢祥平監督と橘郁美プロデューサーに本作の中止を訴えたが、それに対する２人の選択は？そして、それを見た野島の人生の選択は？

スクリーン上は、野島の家庭が崩壊した“あの日”からいきなり１年後に移るが、そこで見る野島の姿は、本作の撮影中に橘郁美プロデューサーが盛んに褒めていた野島が企画中の次回作の製作現場だったから、アレレ、アレレ。そこでの野島の姿を見ていると、彼は監督としてすべての指揮を取っているらしい。アレレ、野島はいつどのようにして立ち直り、今は監督として自信たっぷりに働いているの？

■□■あっと驚く結末に注目！有紗の潔さと“償い”に拍手！■□■

本作の“静かなハイライト”は終盤に訪れてくる。それは、有紗が大好きだという海辺で有紗が野島と２人で並んで座り、静かに語り合うシークエンスだ。私は、野島の取材に対して有紗が「最初から作文は懸賞金目当て」、「感動的な話をするために嘘をついた」と認めるシーンに驚いたが、本作では起業した会社の社長としての彼女の振る舞いに胸クソ悪いと思う面があるものの、野島の取材に対して正直に答える彼女の潔さにはビックリ。感服するばかりだ。しかも折に触れて彼女は「償いのことも考えています」と語っていたが、その意味は一体ナニ？テレサ・テンが歌い、大ヒットした、荒木とよひさ作詞、三木たかし作曲の『つぐない』(84 年)は、「愛をつぐなえば　別れになるけど　こんな女でも忘れないでね」、「愛をつぐなえば　重荷になるから　この町を離れ　暮らしてみるわ」と歌う女心の切なさをテーマにした曲だったが、さて本作で有紗が言う「償い」とは？

それがわかるのは本作ラストだが、何とそれは本作冒頭に映し出されたビルの屋上に有紗が１人で出てくるシークエンスと同じものだから、ビックリ！屋上からの飛び降り自殺のシーンはさまざま映画でさまざまな演出がされているが、さて本作のそれは？こんな形で若き命を散らすのは実にもったいないと思う反面、有紗の潔さと償いの実行に拍手！

2025（令和７）年８月１日記